特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ会誌
2011 年 3 月

もくじ

タンチョウを通しての 環境教育・・1
国際冬期エコキャンプを行いました・・2
スコット・フリーマン博士講演会・・4
標識物語　第 11 話　・・・・・・6
調査活動報告　・・・・・・・・・・7
お見舞いとお願い　・・・・・・・・8
活動記録　・・・・・・・・・・・・8

タンチョウを通しての環境教育

理事長　百瀬邦和

当会の活動の中でも冬の総数調査や標識調査などは多くのボランティアに支えられています。そして、調査に参加された方々には、一日中タンチョウを見続けることによってタンチョウをいっそう身近に感じ、またタンチョウが生活している現場の環境を体験していただける機会にもなっています。

今冬はタンチョウ繁殖地の西端に位置するロシア内陸部のチタ州の大学生に、分布東端にいるタンチョウの現状を観ていただくことができました。本号の中でも紹介しているように、彼らの体験はとても有意義だったようです。さらに、今回私たちが彼らから教わったことも沢山あります。昨冬マイナス 54 度を記録したというチタで暮らす彼らが「こちらの寒さは空気が湿っているのでこたえる」というのです。マイナス 20 度で空気が湿っている？ 考えてもみませんでした。私たちが見慣れている、いやそれしか知らない木の形や林の様子などについてもずいぶん指摘されました。タンチョウが一年中います、というだけではなく、道東の自然環境は地元にいるだけでは判らない特徴をもっているようです。タンチョウを通して現地の自然を学び、それを皆で共有していくという活動をこれからも進めていきたいと思います。

国際冬期エコキャンプを行いました　百瀬邦和

当会では公益信託地球環境日本基金からの助成を受けて、「ロシア・ダウリア地方と北海道東部地方とのタンチョウと湿原保護に向けた環境教育活動推進事業」を昨年度から行っています。今年度はダウルスキー自然保護区と連携した環境教育活動を行っている、トランスバイカル師範大学の学生２名と教官、そして同保護区研究員の計４名が来日され、私たちの活動に参加していただきました。

11 日間の釧路滞在中のスケジュールはかなりハードで、北海道教育大学釧路校での環境教育活動推進に向けての打ち合わせ、釧路市長表敬訪問、ときわ台ヒルズを会場としての市民との交流会、厚岸・根室・弟子屈・釧路湿原周辺地域の自然環境視察、釧路市音別町キナシベツで榊原さんを中心に行われているエコキャンプへの参加（同地でのワークショップにも参加）、キナシベツ湿原を愛する会と共同で開催した講演会（別記）への参加、そして当会の活動の柱の一つである冬の総数調査にも４日間参加されました。

今回のロシアチームは大学から旅費の一部を援助されていますが、さらに経費節約のため、チタから成田空港への便があるウラジオストックまでの移動に片道３日間かかる鉄道を利用されています。釧路での密なスケジュールに加えての長旅は大変だったのではないかと心配していましたが、帰国後にリーダーのタチアナさんから届いたレポートは、今回のキャンプが大成功であったと実感させるものでした。本人の了解を得てこのレポートの一部を紹介します。

ワークショップ風景（左端がタチアナさん）

北海道釧路市で 2011 年 1 月に開催された国際冬期エコキャンプに参加して

タチアナ・ティカーチュク（トランスバイカル師範大学生態学部准教授）

要約　北海道で開催された冬期エコキャンプに参加することにより、日本の人々・生活習慣・北海道東部の自然とその保護を知る機会を与えられた。日本の政府並びに社会が如何にしてタンチョウを絶滅の危機から救ったのかが分かった。タンチョウ保護研究グループ（TPG）のメンバーの指導の下、タンチョウの総数調査に参加し、その方法とデータの処理について学んだ。キナシベツにおける農業と自然保護との共存にむけての実践には頭が下がる。社会に存在する自然に対する畏敬の念が自然保護への一番の力になっていると感じた。

タンチョウ保護研究グループのお招きで私たちのチームは釧路で開催された国際冬期エコキャンプに参加し、いろいろな意味で素晴らしい経験を積むことができました。

まずなによりも、人々の、他の人々あるいはそのまわりの物事への接し方です。いつでもどこでも力になってくださろうとする日本人の大変な親切心に迎えられましたが、実は内心戦々兢々としていた日本における初めの二日間に、私達だけで成田から釧路に着く迄の間ですが、それを特に強く感じました。つづく釧路に到着後の日々はまるで守護天使がみんな総出で連れ回ってくれているかのようでした。本当にいろいろとありがとうございます。

私達はタンチョウ保護研究グループ（TPG）のようなクレージーな方々が集まっている強力な団体とお近付きになれて大変よかったです。TPG のメンバーがツルの数を数えるために日本中から如何にして“渡り”をしてみえるのか、はまさに驚きです。全国津々浦々のこれ程大勢の方々がこれ程上手く連携して活動なさっているのは本当に驚きです。TPG は様々な職業や年代のいろいろな方々を結び付けて

キナシベツ湿原にて

います。そして皆様方がツルのためになさっていることは素晴らしいことです。

榊原さんにはとてもびっくりさせられました。農家の方が自然保護活動に関わるというのは非常にめずらしいことです。榊原さんが地所にある広葉樹の自然林を維持していらっしゃるということはご本人の自然保護への貢献の中で最も意義のあることだと思います。この林は大変小さいため、なんでもなさそうな、ほんのちょっとしたことでその自立性は脅かされてしまう恐れがあります。この林がすこしでも拡がれば素晴らしいことで、是非研究されるべきです。

道東の自然に関しても、その歴史や再生について学びました。北海道と私達の地方であるシベリア東部に位置するトランスバイカリアのエコシステムにはいくつか似ている点がありますが、数多くの異なる種や亜種、さらには属や科の異なるものもあります。生物学者として日本の植物相や動物相が非常に地域性に富んでいるということは以前から知識として知っていましたが、生まれて始めて実際に島固有種の形態を目にすることができました。シラカンバ Betula platypylla のような普通種はここでは固有の亜種になっており生育環境が異なっています。シカやノウサギやカラ類やカンバ類などもシベリアのものに似ていますが異なっています。樹木はしばしば独特な形態をしており大陸のものとは異なり矮小化されています。ねじまがったりずんぐりしたりしているものもありますが、恐らく海風によるものでしょう。私達が見たこのような形の樹木や他の自然物（山、ツル、海、霧）は日本絵画の原形のように思われます。日本絵画に描かれているこれらの自然は私達の絵画にみられるものとは異なっていますが、まさに自然の姿なのです。これは驚きでした。といいますのも、ここに来る前は単にそのような画風であると思っていたからです。

北海道には原生林がほとんど残っていないというのは大変残念なことですが、少なくとも二カ所は皆伐を免れ、現在保護されているということは喜ばしいかぎりです。森林回復に一所懸命な日本の方のご努力は尊敬に値します。元々生育していたような種の構成により森林生態系の再生をする試みはどちらかで研究されているのでしょうか。

エキスカーションで訪れた名所の数々は夢のようでした。私達の誰も海や火山や噴気孔や温泉、またヒトを恐れない野生生物や海鳥、そして太平洋から登る朝日をいままで見たことがありませんでした。私が日本で見たり試したりしたかった夢の数々を実現してくださったのです。私が一番目を見張ったのは火山でした。テレビで見るようではない日本を見られたことが面白かったです。ロシアからあまり訪れる人がいないところに行けたのがよかったです。エキスカーションは非常によく計画され、沢山見聞することができました。

次は私達の北海道滞在におけるヒーローについてです。日本人がタンチョウの生息数の回復に成功したというのは偉大なことです。これらの美しい鳥を先ず自然のなかで、そして次に給餌場で見られたのはすばらしく、まるで劇場にいるようでした。私の友人達はみな私が撮った給餌場のツルの写真に見とれています。ツルがヒトよりシカを恐れているというのは信じられないことです。皆様がおっしゃるようにこれは望ましい状況ではありません。“ヒト抜きに”給餌をする試みなのですね。給餌場を見た今、ツルにヒトを恐れなければいけないとどのように納得させることができるのか、想像するのは難しいことです。特定の場所に固執するという性格が助けになるかもしれませんし、個体群のある程度は再教育することができるかも知れません。しかし昔からある既存の給餌場の近くでは、ツルはヒトを危険なものとは思わないのではないでしょうか。ツルを再教育するのは大変だと思いますが、ご成功をお祈りします。

個体数モニタリングの手法は賞賛に値します。非常に細部に渡り、精度が高く、且つ骨の折れるものです。タンチョウのセンサスに参加するために仕

タンチョウ総数調査に参加

事を休み、大金をかけて集まって来るみなさんには頭がさがります。私達もいくらかセンサスのお役にたつことができたのなら嬉しいです。この総合的な調査に参加し、一日ごとに新しいことをしました。そして最終日に古賀公也博士が調査方法全体のレクチャーをしてくださり、そこで初めて、なぜ経験豊かな書記役の方が私達に幼鳥の数を納得のいく迄何度も数えさせたのか、ということがわかりました。もしかして、調査の全体像が事前にわかっていれば私達のいくつかの失敗も避けることができて、よかったかもしれません。不思議に思うのですが、なぜ日本の学生さん達が参加しなかったのでしょう。冬期エコキャンプに日本の学生さんが参加なされば、日露両国の学生にとり大変よい機会になることと思います。

環境教育に関して特に申し上げたいのは、私達が訪れた鶴居にある日本野鳥の会のビジターセンターや阿寒国際ツルセンターの展示等です。沢山のエネルギーや熱意や夢が、小さな子供からおとなまでのあらゆる人々を対象にした環境教育にそそがれています。鶴居や阿寒で実現化されているいくつかのアイディアは、大変興味深く、また効果的であると思います。例えば、阿寒の給餌場を訪れる方々は皆、実際にツルをもっと身近に感じ、また理解を深めることができますが、さらにツルを通してその世界を自然全般へと広げることが出来ます。

私達チームのメンバー、特に学生は、冬期エコキャンプに参加することにより将来の人生や勉学に役に立ついろいろな経験をすることができました。スケジュールそのものはもちろん有意義ですが、それ以上に、このキャンプを通して私達皆がうけたインスピレーションが重要です。このインスピレーションにより人生や自然とヒトとの関係に対する私達の見方が影響をうけたのですから。

スコット・フリーマン博士講演会　　山根みどり

1 月 21 日、米ワシントン州立大学のスコット・フリーマン教授による「私設自然保護区と環境教育～レオポルド記念保護区の取りくみ～」と題した講演会が、釧路市立博物館講堂で開催されました。この講演会は、キナシベツ湿原を愛する会が、財団法人前田一歩園財団の助成を受けてフリーマン教授を招待し、タンチョウ保護研究グループ・釧路市立博物館との共催で実現したものです 。

スコット・フリーマン博士

フリーマン教授は、長年にわたり、アメリカの生態学者・環境思想家アルド・レオポルドの「土地倫理（Land Ethic)」の思想に基づいて設立された「アルド・レオポルド財団」の活動に関わってこられました。ご自身、アルド・レオポルドの孫、スーザンさんの夫君でもあります。今回の講演では、これまでの取組みと環境教育の重要性についてお話しいただきました。以下は、講演後の Q&A の内容も織り込んだ講演内容の概要です。

まず、私設自然保護区について。(1) 土地倫理とは何か、(2) 土地倫理の考え方を、日常生活にどのように取り入れ、人と環境の調和を進めていけるかに絞って説明します。

土地倫理という考えは、アルド・レオポルドが1947年に著書「A Sand County Almanac（邦訳：「野生のうたが聞こえる」）の中で提唱したものです。彼の考えでは、人間の歴史の中で「倫理」は、自分自身、家族、村、国、すべての人間、土地という順序で進化しました。哲学者でもあったアルド・レオポルドは、まったく新しい考え方として、倫理を土地にまで広げたのです。

この土地倫理の実践として、アルド・レオポルドは1935年に50haの荒廃した土地を農家から買い、家族とともに週末に自然再生作業に取り組みました。そこにあった掘立小屋（Shackと呼ばれている）を再建し、今では財団のシンボル的な建物になっています。毎年植樹を行い、1947年までに1万本を植えましたが、これはもともとその土地に生えていた植生を再生しようとした世界で最初の試みだったと思います。また、ひどい状況になっていた小川を整備してサケの遡上も復活させました。その他、クマやピューマ、鳥類が増えました。ハードな作業でしたが、家族でスキーやアーチェリーをして楽しんだ場所でもあり、土地と家族の両方にとってすばらしい仕事でした。

1970年にアルド・レオポルドは、近隣の6軒の地主とともにグループを組成し、レオポルド自然保護区を設立しました。約束事として、協力して土地の再生と野生生物の保護を行い、地主が土地を売却したい場合には、グループに優先的に買取権を与えました。これがのちにアルド・レオポルド財団となり、保護区全体の管理を行うようになりました。
現在、民有地の地主と州が協力してこの自然再生事業を5,000haの土地の一部で行っています。これには、法的拘束力を持つ保全地役権（Conservation

環境教育センター

1935-1947: Restoring the land　土地の再生

easement）契約が締結されていて、地主は開発制限に同意しています。保護区内では、2軒の農家がトウモロコシ、大豆、牧草を商業的に栽培していますが、新たな木の伐採、家畜の放牧、家の新築は禁止されます。土地の保全には、このような契約以外に、土地購入、ボランティアの協力を得るなとのテクニックがあります。

環境教育についてですが、土地倫理という考え方は、アメリカの環境保全に大きな影響を与え、今では全米の学校の授業で教えられています。北海道でも阿寒と北斗で環境教育に力を入れておられると聞き、うれしく思います。子供への環境教育では、保護区の環境教育センターという施設へ学校ぐるみでやってくる子供たちに、じかに自然に触れさせ、人と自然の相互作用を体感させています。楽しみながら学べる仕組みを作っています。都会の子供はこのような体験を忘れず、人と土地とのかかわりの第一歩を踏み出します。子供のころに自然に接する機会のないまま成長した人は、土地倫理という考え方を身につけることは難しいのです。自然を心で感じることがとても重要です。

財団設立以前は、このシンボル的な小屋の前で週末にセミナーが開かれていました。近隣の農家の人たちが対象の場合、野生動物から作物を守る方法などを、また裕福な地主たちには、買った土地の自然再生に関する情報を提供していました。

私設自然保護区と環境教育の効果として、「良い家族関係が築ける」、「素晴らしいコミュニティができる」、「良好な環境が再生される」点が挙げられると思います。政府は今以上に土地を買って国立公園などの自然保護区を作ることは難しく、私設保護区の役割はこれから大きくなるでしょう。

第 11 話　子供の独立 !?（82V － 036）

西岡　秀観

今回は、子別れ（親離れ）した後も越冬地に同じ農家を使用した事例を紹介します。その主役は 82V（2001 年生まれ、メス：①）とその子供の 036（2006 年生まれ、メス：②）です。82V

①：82V（2006 年 2 月）　②：036（2010 年 12 月）

は、2005 年度シーズンは阿寒の給餌場で越冬しました。2006 年度には子供に 036 の標識を付けました。2007 年度､82V は子供に 050（2007 年生まれ、メス）の標識が付けられ、阿寒には現れず、繁殖地近くの農家で越冬しました。（③）その年の 036 は

③:82V と 050（2008 年 1 月）

何処でも確認されず、安否が心配されました。

2008 年 11 月、別海町のデントコーン畑に多くのタンチョウが集まっているという話を聞き、調査に行ったところ、036 の姿を確認しました（④）。前年の総数調査では確認されなかったので、何処で越冬したのかわかりません。2009 年 1 月、82V を確認しようと越冬している農家さんに行ったところ、

④:036（2008 年 11 月）　⑤:036（2009 年 1 月）

堆肥ヤードの前を歩く 036 を確認（⑤）。2 月には同じ箇所で 82V を確認（⑥）したので、子別れ（親離れ）した後も同じ農家を利用していることがわかりました。2009 年度冬も同じ農家に行ったところ、

⑥：82V（2009 年 2 月）

標識の付いている 1 羽のタンチョウがいて、確認したら 036 でした。その後もう 1 件の標識鳥が訪れる別の農家に行き、もう一度（約 45 分後）農家に戻ったところ、今度は 2 羽のタンチョウがいて、標識から 82V と確認しました。2 年連続で同じ農家を利用する親子のタンチョウ、しかし子別れ（親離れ）した後のせいか一緒に利用しているところは確認できませんでした。前に T25 と 025 の話で書きましたが、オスは親離れ後も出生地付近に戻る傾向がありますが、036 はメスでも出生地付近に固執したことになります。もしかすると､2008 年のデントコーン畑(ある意味集団コンパ？）には気に入るオスがいなかっ

たせいかもしれません。タンチョウの世界でも「婚活」はシビアなのかも・・・。

そして2010年度、なんと036がサンクチュアリに現れました、しかも2羽で（⑦）。相手にも標識が付いていて、確認したところ42V（1998年生まれ、オス）でした。42Vは、2001年に標識のないメス

⑦:42Vと036（2010年12月28日）

とカップルになり、2005年には2羽の子連れでサンクチュアリに来ていました。このことから、42Vは相方を亡くした後に036と知り合い、意気投合してサンクチュアリまで来たと思います。036の出生地の呪縛（？）から解放したのは、やはり王子様の出現だったようですね。その時の82Vはというと、今までと同じ農家で親子3羽仲良く過ごしていました（⑧）。めでたし、めでたし。

⑧:82V（2010年12月30日）

今回をもちまして、「標識物語」は一旦終了いたします。これまで標識鳥によるタンチョウの生態や行動の一部を紹介させていただきましたが、いかがでしたでしょうか。今までの紹介はごく一部ですので、機会がありましたら是非道東に来ていただき、実際に見ていただきたいと思います。今後は、別の形で標識鳥に関する情報をお伝えできればと思っています。その時は、またよろしくお願いいたします。今までお付き合いいただきまして、ありがとうございました。

調査活動報告

毎年恒例の冬のタンチョウ総数調査が1月22日から30日まで行われました。今年も昨年と同様に、天候に恵まれ、順調に調査ができました。厳寒の中、のべ130名以上の方がボランティアで調査に参加してくださいました。

今年の調査には、国際冬期エコキャンプに参加したロシアの研究者と学生4名と講演のために来日されたフリーマン博士ら2名の参加もあり、国際色豊かな調査となりました。

現在、データを集計中で、正式な結果をご報告できるのはもう少し先になると思いますが、概算値では昨年よりもやや少ない数字となっています。北海道のタンチョウの生息数は長年にわたって増加傾向でしたが、私たちの調査でも昨年くらいから横ばいぎみです。いよいよ生息数が頭打ちになったのかもしれませんが、そう言えるかどうかはまだわかりません。と言いますのも、近年は大きな給餌場に集まらないで越冬するツルが増加しており、それらを探しきれていないかもしれないからです。特に今年は雪も少なく、かなり分散していたことが考えられます。

数が増えているのか減っているのかは今後のタンチョウの未来を考える上で重要な情報です。今後、調査方法の見直しも含めて、より正確な数が把握できるように考えていきたいと思います。

調査風景（鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ）

東日本大震災で被災された皆さまに心より
お見舞い申し上げます。

遠く北海道の地においては被災地の様子は報道を通して知るのみですが、かの地においても、こころ同じく、タンチョウに想いを寄せる方たちがいらっしゃいます。以前にもご紹介した、宮城県蕪栗沼（かぶくり）に飛来したタンチョウを見守り続けている齋藤肇さんから、御自身のご無事とともにタンチョウの一報をいただきました。

『3月11日　午前、役場鈴木氏からコウノトリがやってきたと携帯に電話あり。震災、震度６強、２時過ぎ。道路損壊、土手一部崩れる。 棚田の様子を見に軽トラで向かう途中、タンチョウ、「しんぽう囲い中央排水路」付近で採餌、平気そう。

３月18日　朝、母がコウノトリとタンチョウが「ふゆみず斉藤田」にいるのを目撃。』

地震、津波、さらに原子力発電事故というかつてない惨状が伝えられるなか、ここに生きる人々、生きものたちの確かな力を信じ、祈るばかりです。北海道沿岸部も甚大な被害を受け、漁業関係をはじめ、今後数年に及ぶ影響が予想されます。それでも、雪融けの水辺でタンチョウは卵を抱き始めています。いつのときも、生命のいとなみが力強く続くことを願います。

齋藤さんは「ふゆみずたんぼ」と呼ばれている環境保全型の水田作りに取り組んでいられる方です。すでに注文のキャンセルなど風評被害も始まっているようです。そこに住む人々の生活を支えていく支援もお願いしたいと思います。

蕪栗グリーンファーム　宮城県大崎市田尻蕪栗字伸萠西19　TEL ＆ FAX　0229-39-2706
e-mail：tasyumura@ybb.ne.jp
http://tasyumura.nengu.jp/index.htm　（松本）

＜活動記録（2010年12月～2011年３月）＞

12月３日　運営会員連絡会（５名出席）
12月５日　会誌「Tancho」第11号発送
12月19日　釧路湿原ラムサール条約登録30周年記念イベント「湿原たまてばこ」参加
１月７日　運営会員連絡会（６名出席）
１月10日　タンチョウ総数調査説明会
１月17日～27日　国際冬期エコキャンプ
１月20日　ワークショップ「アメリカとロシアで行われている野外環境教育の紹介」ロシア・アメリカなどから参加者20名（於：キナシベツナショナルトラストの家　共催：キナシベツ湿原を愛する会）
１月21日　フリーマン博士講演会「私設自然保護区と環境教育～レオポルド記念保護区の取りくみ～」（於：釧路市立博物館　共催：キナシベツ湿原を愛する会、釧路市立博物館）
１月22日～30日　タンチョウ総数調査
２月４日　運営会員連絡会（７名出席）
３月４日　運営会員連絡会（６名出席）

＜会員（３月７日現在）＞

・運営会員：25名、個人サポート会員：128名、団体会員：13団体

Tancho Protection Group（TPG）newsletter　TANCHO
Twelfth issue　March 2011

＜表紙写真＞
エコキャンプにて森を散策するロシアの学生さん（キナシベツにて）
2011年１月20日
百瀬邦和撮影

特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ
（編集：松本文雄）
〒085-0036
北海道釧路市若竹町10番２号
Tel/Fax 0154-22-1993
e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp
URL: http://www6.marimo.or.jp/tancho1213